

● いじめ問題対策連絡協議会作成リーフレット

「子どもたちの望ましい人間関係形成に向けて」

一 「子どもたちの現状」

子どもたちは、友達をつくって安心したいという帰属欲求がある。これはいつの時代も変わらない。友達をつくる過程で、上手にコミュニケーションをとれなかったり、誰かを仲間外れにしたりすることもある。私たちは子どもたちの様子をよく見て、上手に関わり、「よりよい友だちづくり」へと導くことが重要である。

別海中央小学校では、少年団活動に加入している子どもたちが多い。その活動を通じて友達づくりを行うなど良い影響が生まれている。一方で、子どもたちの間に上下関係が生まれないように、注意深く見守ることも大切である。



【インタビューに答える林SSW】

二 「いじめの認知について」

子どもたちが、自分たちの抱える悩みを、「いじめアンケート」にどれだけ書き込めるか、発信できるかが大切である。学校全体で、「いじめられても誰にも相談しない」の項目を0人にするよう、という目標を掲げ、取組んでいる。

私たちは、「いじめアンケート」の書き込みを恐れず、子ども理解のチャンスと捉えることが大切である。「いじめ認知件数」が多いと、「自分の学級経営がうまくいっていないのではないか」、「自分に対する評価が下がってしまうのではないか」と考えがちである。そのような捉えではなく、「いじめはあつて当たり前」、「いじめの早期発見・早期対応と加害児童も被害児童も共に育ちあう「より良い仲間づくりの出発点」と捉えてもらいたい。いじめアンケートの結果については管理職やSSW等と情報を共有し、組織的に対応することが効果的である。

私たちは、子どもたちの抱える悩みを把握し、個別の面談等を通じて子どもたちに寄り添い、信頼関係を築くことが大切である。子どもたちは、自分の悩みを私たちや家族に伝え、「わかってもらえた」、「見守ってくれている」と体感すると、自分から悩みを発信できるようになる。

別海町立別海中央小学校

林 よし子 SSW

(スクールソーシャルワーカー)

私たちは、忙しくても、子どもたちからのSOSを見逃がさないように気を付けなければならぬ。また、自分からSOSを発信することが苦手な子どもたちに対しては傍観せずに、こちらからアプローチすることも重要である。

三 「各種アンケートについて」

私たちは、「いじめのアンケート」、「Q-U」、「ほつと」及び学校評価等の客観的なデータを分析し、教職員の認識と子どもたちの認識にズレがないか、不一致に気付くと、深い子ども理解が可能になる。子どもたちが何に困り、私たちに何を求めているのかを知り、教職員全体でアプローチしたいものである。学校は、各種アンケートの結果や分析、解決に向けた取組みを、ブログに掲載したり、お便りで配付したりして、家庭や地域と情報を共有し、連携していじめの予防と解消に取り組んでいる。

四 「最後に一言」

私たちは、学校が子どもたちにとって「自分のことを認めてもらえる場所」、「安心して成長できる場所」となるように環境を整える必要がある。子どもたちのよさに目を向け、温かい言葉のシャワーを注ぎ、日々、いじめを生まない風土づくりに取り組むことが大切である。